

## 北海道言語研究会 研究例会報告

2024 年度は下記の日程とプログラムで研究例会を開催した。参加者諸氏の間で活発な議論が交わされた。

### ・ 第 27 回研究例会

(2024 年 9 月 27 日 (金) 13:30--16:20; 会場: 室蘭工業大学・教育研究 2 号館 Q502 号室)

13:30 開会

13:40--14:25

塩谷 亨 (室蘭工業大学・ひと文化系領域)

「食事の要素の区分を表す「ごはん」、「おかず」、「つまみ」に対応するポリネシア諸語の語彙について」

日本語においては、典型的な一つの食事の要素は一般的に「ごはん」と「おかず」に区分される。この区別は、例えば、英語に単語レベルで翻訳しようとした場合には適切な語を見つけるのは難しい。しかしながら、この区分に極めて類似した区分がポリネシア諸語の一つであるハワイ語では'ai と i'a という 2 つの語で表される。そのハワイ語の 2 つの語による区分と日本語の「ごはん」と「おかず」による区分について意味及びそれが指すものについて比較し、また、ハワイ語以外のポリネシア諸語ではこのような区分がなされているのかどうかについても述べる。また、日本語には「おかず」とよく似た概念として、酒の「つまみ」というものがある。ポリネシアには伝統的には飲酒という習慣はなかったが、ハワイ語には、酒の「つまみ」とよく似た位置づけの単語があり、それについても述べる。

14:30--15:15

三村竜之 (室蘭工業大学・ひと文化系領域)

「アイスランド語における無声歯茎側面破擦音にまつわる諸問題」

アイスランド語では、いわゆる絶対語頭(*absolute initial*)の位置を除き語中 (母音間) や語末 (音節末 *coda*) のいずれの位置にも、無声歯茎側面破擦音 (*voiceless alveolar lateral affricate*) が現れ得る。頻度の点ではアイスランド語において珍しい音ではなく、また聞き取りも発音も取り立てて困難ではない。そのためか、教育的観点から編まれた *Stefán Einarsson (1945)* においてすら「破擦音」としての記述は見られない。また、伝統的なアメリカ構造主義音素論の枠組みに依拠する *Haugen (1940--41)* や音韻理論の枠組みに依拠する *Kristján Árnason (2011)* においても「破擦音」に関する言及がなく、従って音韻論的な視点からの分析もなされていない。しかしながら、実際に聞き取り調査を行うと、以下に示すような、無声歯茎側面破擦音にまつわる様々な問題に直面する: i) 無声歯茎閉鎖音の長さ, ii) 自立した音素であるか複数の音素の結合か? 結合であるならば、どの音

素とどの音素の結合か？ 歯茎閉鎖音は無声無気音かあるいは無声有気音か？、iii) 複合語、形成や人名の愛称における子音連結の簡略化の際の無声閉鎖音の脱落（一般的な簡略化の傾向に従えば側面音が脱落することが期待される）、iv) 人名の愛称における側面音の二重子音との交替。本発表では、発表者が採取した一次資料に基づき、アイスランド語における無声歯茎側面破擦音の音韻解釈の試論を提示し、試論を通じて上記の問題点の解明も試みる。

15:20 -- 16:05

坂本裕子（室蘭工業大学・ひと文化系領域/国際交流センター）

郭碧蘭（台湾国立屏東大学応用日本語学科）

「台湾人日本語学習者の日本でのインターンシップでの学び-インターンシップ参加に至るプロセス」

海外の日本語学習者の学習意欲や日本での就業意欲を高めるための提言を行うことを目的として、台湾の大学で日本語を専攻し、在学中に日本でのインターンシップを経験した学生を対象に、インターンシップでの体験をどのように意味づけ、その後のキャリア形成にどのような影響を及ぼすのかを明らかにするため、縦断的に調査を行っている。今回、新たにインターンシップに参加した学生への調査結果を加え、5名の学生が大学で日本語を専攻することを決め、インターンシップ参加に至るプロセスを複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model : TEM）を用いて解明する。

16:10--16:20

総会（『北海道言語文化研究』編集委員より報告事項）

16:20 閉会

・ 第 28 回研究例会

(2025 年 3 月 28 日 (金) 10:00--15:20; 会場: 室蘭工業大学・教育研究 2 号館 Q502 号室)

10:00 開会

10:05--10:45

John Guy Perrem (室蘭工業大学・ひと文化系領域)

小野正嗣 (室蘭工業大学・ひと文化系領域 / 国際交流センター)

Development, Actions, and Impact of the English Presentation Club at MuroranIT

This presentation examines the development, actions, and impact of the English Presentation Club at Muroran Institute of Technology. The club was initiated to enhance students' English communication and presentation skills. The club provides a weekly interactive environment where students give presentations, participate in discussions, and engage in various activities to practice English. It also serves as a meeting point for Japanese students, international students, and visitors, creating opportunities for cross-cultural communication and exchange in a relaxed environment. The presentation will discuss how the club has evolved, the activities that take place, and its role in supporting students' English development. It will also share student feedback via a club survey conducted in February 2025.

10:50 --11:30

三村竜之 (室蘭工業大学・ひと文化系領域)

「アイスランド語における ó-orð について: アイスランド語アクセント調査報告」

本発表の目的は、2025 年 3 月にアイスランド共和国レイキャヴィーク市にて実施したアイスランド語のアクセント調査の報告にある。調査対象としたアクセントにまつわる現象や採取したデータの提示、分析結果を報告する。本発表で扱うの事項は次の通り: -ó で終わる短縮語 ó-orð (o-words) の音韻論的ならびに韻律的な生成メカニズムや使用に関わる個人差、他言語における類例との関連性からみた ó-orð の起源。

\* 本研究調査は科研費の助成により行なった (課題番号: 24K03858)。

13:00 -- 13:40

山田祥子 (室蘭工業大学・ひと文化系領域)

「デルス・ウザーラと V. K. アルセーニエフによる《知の共同生産》について」

デルス・ウザーラは、ロシアの地理学者 V. K. アルセーニエフが 1900 年代に行った沿海地方の探検で現地案内役を務めたナーナイの狩人である。アルセーニエフの旅行記をとおして、ロシア極東の先住民族を象徴する存在となった。黒澤明監督による同名映画 (1975 年) が国際的な評価を得て、日本でも大きな話題となっ

た。旅行記や映画という媒介に依存せず、より客観的にデルス・ウザーラの実像に迫ろうとする研究も行われている。歴史学・民族学・言語学などによるそのような研究は、往年の訪問学者による記述と現地から聞こえる声とを対等に扱う《知の共同生産》という概念で歴史を再構築しようとする、ポストコロニアリズム的な潮流の一部に紐づけることができる。本発表では、1) V. K. アルセーニエフによる旅行記の性格、2) 沿海地方の民族状況、3) デルス・ウザーラが使用した言語、という三つの観点から、デルスとアルセーニエフによる《知の共同生産》について考察する。

13:45 -- 14:25

塩谷 亨（室蘭工業大学・ひと文化系領域）

「ポリネシア諸語における中立格前置詞の用法の差異について-ハワイ語、タヒチ語、サモア語の同格用法を中心に」

ポリネシア諸語の前置詞のほとんどは対格、場所格、属格などの格表示の機能を持つが、前置詞'o(言語によっては ko となる)は、特定の格の表示ではない様々な機能を持つ（便宜上「中立格前置詞」と呼ぶ）。最も頻繁に見られる用法は、述語名詞句の指標としての用法と固有名詞の指標としての用法であるが、それに加えて、「太郎という男が」のように名詞句が別の名詞句を修飾する同格の名詞句の指標としての用法もある。そのような中立格前置詞を用いた同格の用法について、ハワイ語、タヒチ語、サモア語の用例を対照したところ、タヒチ語では、他の2言語とは違い、修飾される側の名詞句（「太郎という男」の場合は「男」）に指示詞要素が付加される事例が頻発するという特徴がみられた。

14:30 --15:10

坂本裕子（室蘭工業大学・ひと文化系領域/国際交流センター）

Wayne Schams（項偉恩）（台湾国立屏東大学英语学系）

Bridging with world words 2.0: Encounter between Japanese engineering students and Taiwanese liberal arts students, organic connections and collaborative project work

This study is a continuation of a study conducted last year involving an English collaboration project comprised of non-native English speakers in Japan and Taiwan. In the present study, 15 Taiwanese undergraduate university students majoring in English (liberal arts) were paired with 15 Japanese undergraduate university students majoring in engineering and served as pre-service English tutors/advisors to their Japanese counterparts. We reconstructed a project work framework in which there was a chemical reaction of fusion and organic connection between the Japanese and Taiwanese

students with the aim of promoting mutual learning. The effectiveness of this framework will be discussed based on an analysis of the survey results, with a focus on the English proficiency of the Japanese and Taiwanese students, improvement in cross-cultural understanding, group dynamics, and self-evaluation.

15:15 -- 15:25

総会（『北海道言語文化研究』編集委員より報告事項）

15:25 閉会

報告書

2025 年 3 月 31 日

1. 事業名： アイヌ語ワークショップ 2024

2. 主催： 北海道言語研究会

3. 概要：

国立アイヌ民族博物館と室蘭工業大学の包括連携協定（2023 年 10 月 26 日締結）にもとづき、同博物館からアイヌ語を専門とする研究職員 3 名の講師を派遣いただき、アイヌ語の入門的な指導をいただいた。

今回は協定締結後初の試みとして、室蘭工業大学の言語学関係教員で運営する「北海道言語研究会」が主催し、同研究例会との同日開催のワークショップを行った。

言語学関係教員、そのほか、学内で、言語習得（語学）に関心のある者、異文化コミュニケーションに関心のある者、アイヌの歴史・文化に関心のある者などを中心とした、小規模かつ参加者主体的な学習会として企画した。

当日は、アイヌ語のアクセントや単語、言語状況などの基本事項を学んだ。レクチャーのほかに、グループワークやゲームなどもあり、参加者どうしだけでなく参加者と講師との会話もしやすく、和気あいあいとした雰囲気であった。最後にアイヌ語を続けて学習するための参考資料（ウェブサイトなど気軽に利用できるもの）が紹介された。

4. 実施日時： 2024 年 9 月 27 日（金）10:00～12:00

5. 実施場所： 室蘭工業大学 教育・研究 3 号館（N 棟） N207  
（〒050-8585 北海道室蘭市水元町 27-1）

6. 講師： 国立アイヌ民族博物館 研究学芸部  
研究主査 小林 美紀 氏  
研究主査 中井 貴規 氏  
研究員 深澤 美香 氏

7. 対象： 室蘭工業大学の教職員・学生

8. 参加定員・参加費： 25 名（要申込）・参加無料

9. 参加者（結果）： 14 名（院生 1 名、教員 12 名、職員 1 名）

10. 担当： 室蘭工業大学 山田 祥子

## スタイルシート

- (1)使用言語: 日本語もしくは英語。
- (2)原稿:『WORD』で読める形式のファイル (doc または docx ファイル )と印刷時の体裁確認のための PDF ファイルを提出する。宛先: HLCJournal@gmail.com スタイルシートのテンプレートおよびPDF化用のフリーソフトに関しては、本研究会の WEB ページを参照。(URL : <http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/style/> )
- (3)余白(マージン ): 上端 30mm 下端 25mm 左端 25mm 右端 25mm。
- (4)行数:37 行。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
- (5)字数:全角 39 文字または半角 78 文字。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
- (6)フォント:和文は MS 明朝、MS P 明朝、英文は Times New Roman のみを認める。特殊文字を使用する際には、unicode を用いることとする。
- (7)ポイント数および書体 :
- |        |           |                  |
|--------|-----------|------------------|
| 題名:    | 18 ポイント   | 太字 中央寄せ          |
| 氏名:    | 14 ポイント   | 太字 中央寄せ          |
| 要旨:    | 9 ポイント    | 「要旨」という文字のみ太字    |
| キーワード: | 9 ポイント    | 「キーワード」という文字のみ太字 |
| 本文:    | 10.5 ポイント |                  |
| セクション: | 10.5 ポイント | セクション番号と題は太字     |
| 謝辞:    | 9 ポイント    | 「謝辞」という文字のみ太字    |
| 注:     | 9 ポイント    | 「注」という文字のみ太字     |
| 参考文献:  | 9 ポイント    | 「参考文献」という文字のみ太字  |
- (8)タイトルおよび氏名:和文と欧文の2種類で書く。本文と同じ言語を先にする。和文の姓と名の間には全角の空白を 1 つ入れる。欧文の氏名は姓をすべて大文字にする (例:John BINTLET)。和文と欧文それぞれの間に 1 行の空白を入れる。
- (9)ページ数:原則として図表を含め、20 ページ以内とする。
- (10)要旨:日本語でも英語でも可。場所はタイトルの下に 1 行空白を入れた後。分量は日本語の場合 400 字以内、英語の場合は 200 語以内。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)、両端揃えにする。
- (11)キーワード: 5 つ程度のキーワードを要旨の下に 1 行あけて書く。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)。
- (12)セクション (節):セクションの番号は 1 から始める。セクションおよびサブセクションの番号の形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。
- (13)段落:両端揃えにすること。段落の最初の文字の下げ方等の形式は問わないが一貫した書き方になっていること。

(14)注:通し番号をつけて脚注もしくは後注とする。通し番号の形式に指定はないが、一貫していることと、注の番号が行頭に来ないようにすること。ただし過去における研究発表情報等はタイトルの後ろに \*(半角アスタリスク)を付加し、注の先頭で言及する。

(15)参考文献:文献は本文の後ろ、後注がある場合には注の後ろに付加する。形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。

(16)執筆者紹介:①氏名、②所属機関・部署、③メールアドレス、④ URL、⑤電話番号等を論文末に付加する。①は必須。②以降は任意で、その他の事項も付け加えることができる。現在の所属機関がない場合には、元～でも可。

(2021 年 3 月 31 日改定)





----- 1 行あける -----

----- One line inserted -----

----- One line inserted -----

----- One line inserted -----

-----One line inserted-----

----- One line inserted -----

----- One line inserted -----

----- One line inserted -----

----- One line inserted -----

----- One line inserted -----

Email: [jbintlet @mm.muroran-it.ac.jp](mailto:jbintlet@mm.muroran-it.ac.jp)



北海道言語研究会 <https://u.muroran-it.ac.jp/hlc/>

本研究会は談論風発のくだけた雰囲気の集まりで、言語に関するあらゆる分野に興味のある方に開かれています。皆様のご参加、ご発表、ご投稿を心よりお待ちしております。

### 『北海道言語文化研究』への投稿について

研究論文の投稿をご希望の方は、本研究会WEBページの「スタイルシート」で投稿規定をご覧になり、スタイルシートに則った原稿を、[HLCJournal@gmail.com](mailto:HLCJournal@gmail.com)までお送りください。締め切りは11月30日です。原稿受領後、査読を実施し、その結果に基づいて編集委員会が掲載の可否を決定します。

### 研究発表について

本研究会では研究例会を3月と9月に開催しています。研究発表をご希望の方は、下記宛に発表の題目と要旨をemailで[hokkaidolinguisticcircle@gmail.com](mailto:hokkaidolinguisticcircle@gmail.com)までお送りください。持ち時間は発表30分、質疑10分です。発表要旨は『北海道言語文化研究』の研究例会報告に掲載いたします。開催日時に関しては、受付後、後日メールや本研究会WEBページでお知らせする予定です。

---

## 北海道言語文化研究 第23号

2025年3月31日発行

発行者：北海道言語研究会

投稿宛先：HLCJournal@gmail.com

連絡宛先：[hokkaidolinguisticcircle@gmail.com](mailto:hokkaidolinguisticcircle@gmail.com)

〒050-8585

北海道室蘭市水元町27-1

ひと文化系領域

北海道言語研究会窓口

# 北海道言語文化研究

第 23 号

2025 年

---

## 論文

- アイヌ語を母語とする世代と暮した日本語を母語とする人のアイヌ語の語彙理解(1)  
岸本 宜久 1
- アイスランド語における人名の愛称の音韻論と韻律論  
三村 竜之 25
- 日本語が中級レベルにある工学系大学院留学生の就職活動:就職支援を目的とした  
日本語教育の可能性を探るインタビュー調査  
石川 朋子、山路 奈保子、上野 まり子、高木 佳奈 57
- 台湾人日本語学習者のキャリア選択における意思決定要因についての一考察  
坂本 裕子、郭 碧蘭 73
- Understanding Motivation in Learning English: A Study of Japanese  
University Students 85  
John Guy PERREM

# Journal of Language and Culture of Hokkaido

No. 23

2025

---

Articles

- Understanding of Ainu Language Vocabulary Among Japanese Speakers Who Have Lived with Native Ainu Speakers (1)** Yoshihisa KISHIMOTO 1
- Phonological and Prosodic Aspects of the Nickname Formation in Icelandic** Tatsuyuki MIMURA 25
- Job Hunting of International Students with Intermediate Level of Japanese at Engineering Graduate School: An Interview Survey to Explore the Possibility of Japanese Language Education for Supporting their Job Search Activities** ISHIKAWA Tomoko, YAMAJI Naoko, UENO Mariko, TAKAGI Kana 57
- A Study on the Determinants of Career Decision-Making Among Taiwanese Students Majoring in Japanese** SAKAMOTO Yuko, Pi-lan KUO 73
- Understanding Motivation in Learning English: A Study of Japanese University Students** John Guy PERREM 85

**The Hokkaido Linguistic Circle**